

公益財団法人金原一郎記念医学医療振興財団主催、医学書院「総合リハビリテーション」編集室後援の「第 20 回総合リハビリテーション賞」授賞式が 2012 年 9 月 26 日、医学書院本社にて行われた。

受賞論文は、外山慶一・他による「神経筋電気刺激療法(neuromuscular electorical stimulation ; NMES)による嚥下機能改善へ向けた舌骨と喉頭運動の検討」(総合リハ:39 巻 10 号, 2011)である。

当日は、「総合リハ」編集顧問、上田 敏氏より賞状・盾・賞金(10 万円)が論文筆頭者の外山氏に贈られた。

2011 年発行の「総合リハ」第 39 巻に掲載された投稿論文 50 篇のなかから、編集同人による推薦を経て、編集委員会において外山氏らの上記論文を「総合リハ」賞と決定した。

受賞論文は、嚥下機能に対する高電圧パルス電流を用いた神経筋電気刺激の有用性を検討したもので、16 名の健常成人男性を対象にデータを集め、その後、1 名の嚥下障害患者の嚥下訓練に導入しその結果を報告している。

「嚥下障害に対するリハビリテーションは活発に行われているが、急速に広がっただけに、いろいろな職種の人が行っている領域で、方法によっては事故につながりかねないこともあるなかで、今回の研究のようにエビデンスを求めていくのはたいへん重要なことだ。臨床神経生理の手法が診断だけでなく、リハビリテーションの治療手段として利用され、ST がその成果をまとめたことも評価したい。」と編集委員を代表して木村彰男氏(慶應義塾大学)が講評を述べた。

弊誌には「総合リハビリテーション」の名にふさわしく、医師だけでなく、さまざまなリハビリテーション関連職種の方から論文を投稿いただいている。歴代の受賞者は、医師、PT、OT、看護師、心理士とさまざまだが、講評でも触れられているように、今回 20 回目にして初めて言語聴覚士(ST)が受賞した。

外山氏は、「時間をかけ、慎重に行った研究が評価されてうれしい」と受賞の喜びを語り、電極を埋め込むのではなく、臨床により応用しやすい表面か



受賞者の外山慶一氏

らの電気刺激でリハビリテーションができないかと考えたのが研究のきっかけであること、さらに「この賞に恥じないように、今後もセラピストの視点から研究を行って、患者さんをよくしたい」と熱意を語った。

授賞式後の祝賀会では編集委員から「食べたいという気持ちがあってもリスクが高く嚥下訓練ができなかった患者さんに効果があった、というようなデータを集めて欲しい」、「比較的簡単な手技でできるので、マニュアルがきちんとできれば ST でなくても誰でもできると思う。応用範囲が広がっていくように研究を進めていただいて、われわれに役立つようにして欲しい」、など外山氏に今後の研究への期待が寄せられた。

本賞は、職種は問わず、「総合リハ」誌に論文掲載時に 45 歳までのリハビリテーション領域の若い研究者がその受賞対象となる。年々投稿論文数が増え、狭き門ではあるが、本賞をめざして、ふるってご投稿いただきたい。